



# Red Hat OpenShift AI Self-Managed 2.9

## リリースノート

このリリースに関連する機能、機能拡張、解決された問題、および既知の問題



# Red Hat OpenShift AI Self-Managed 2.9 リリースノート

---

このリリースに関連する機能、機能拡張、解決された問題、および既知の問題

## 法律上の通知

Copyright © 2024 Red Hat, Inc.

The text of and illustrations in this document are licensed by Red Hat under a Creative Commons Attribution–Share Alike 3.0 Unported license ("CC-BY-SA"). An explanation of CC-BY-SA is available at

<http://creativecommons.org/licenses/by-sa/3.0/>

. In accordance with CC-BY-SA, if you distribute this document or an adaptation of it, you must provide the URL for the original version.

Red Hat, as the licensor of this document, waives the right to enforce, and agrees not to assert, Section 4d of CC-BY-SA to the fullest extent permitted by applicable law.

Red Hat, Red Hat Enterprise Linux, the Shadowman logo, the Red Hat logo, JBoss, OpenShift, Fedora, the Infinity logo, and RHCE are trademarks of Red Hat, Inc., registered in the United States and other countries.

Linux<sup>®</sup> is the registered trademark of Linus Torvalds in the United States and other countries.

Java<sup>®</sup> is a registered trademark of Oracle and/or its affiliates.

XFS<sup>®</sup> is a trademark of Silicon Graphics International Corp. or its subsidiaries in the United States and/or other countries.

MySQL<sup>®</sup> is a registered trademark of MySQL AB in the United States, the European Union and other countries.

Node.js<sup>®</sup> is an official trademark of Joyent. Red Hat is not formally related to or endorsed by the official Joyent Node.js open source or commercial project.

The OpenStack<sup>®</sup> Word Mark and OpenStack logo are either registered trademarks/service marks or trademarks/service marks of the OpenStack Foundation, in the United States and other countries and are used with the OpenStack Foundation's permission. We are not affiliated with, endorsed or sponsored by the OpenStack Foundation, or the OpenStack community.

All other trademarks are the property of their respective owners.

## 概要

リリースノートでは、Red Hat OpenShift AI バージョン 2.8 の新機能、機能拡張、解決された問題、および既知の問題について概説します。

---

## 目次

第1章 OPENSIFT AI の概要 .....	3
第2章 新機能および機能拡張 .....	4
2.1. 新機能 .....	4
2.2. 機能拡張 .....	4
第3章 テクノロジーレビューの機能 .....	6
第4章 サポートの削除 .....	7
4.1. データサイエンスパイプライン V1 が V2 にアップグレード .....	7
4.2. 埋め込みサブスクリプションチャンネルが使用されなくなる .....	7
4.3. バイアス検出の削除 (TRUSTYAI) .....	7
4.4. ワークベンチのバージョン 1.2 ノートブックコンテナイメージがサポートされなくなる .....	7
4.5. BETA サブスクリプションチャンネルが使用されなくなる .....	8
第5章 解決した問題 .....	9
第6章 既知の問題 .....	11
第7章 製品機能 .....	29



## 第1章 OPENSIFT AI の概要

Red Hat OpenShift AI は、人工知能および機械学習 (AI/ML) アプリケーションのデータサイエンティストおよび開発者向けのプラットフォームです。

OpenShift AI は、オンプレミスまたはクラウドで AI/ML モデルとアプリケーションを開発、トレーニング、提供、テスト、監視するための環境を提供します。

データサイエンティスト向けに、OpenShift AI には、Jupyter と、モデル開発に必要なツールおよびライブラリーで最適化されたデフォルトのノートブックイメージのコレクション、そして TensorFlow および PyTorch フレームワークが含まれます。モデルのデプロイおよびホスト、モデルの外部アプリケーションへの統合、任意のハイブリッドクラウド環境でホストするためのモデルのエクスポートを行います。データサイエンティストは、Docker コンテナを使用して、データサイエンスパイプラインを備えたポータブル機械学習 (ML) ワークフローを構築することで、OpenShift AI でデータサイエンスプロジェクトを強化できます。Graphics Processing Unit (GPU) と Habana Gaudi デバイスを使用して、データサイエンスの実験を加速することもできます。

管理者向けに、OpenShift AI は、既存の Red Hat OpenShift または ROSA 環境で、データサイエンスワークロードを有効にします。既存の OpenShift アイデンティティプロバイダーを使用してユーザーを管理し、ノートブックサーバーで利用可能なリソースを管理し、データサイエンティストがモデルの作成、トレーニング、ホストに必要なリソースを確実に入手できるようにします。Graphics Processing Unit (GPU) デバイスおよび Habana Gaudi デバイスなどのアクセラレーターを使用してコストを削減し、データサイエンティストが、エンドツーエンドのデータサイエンスワークフローのパフォーマンスを向上できるようにします。

OpenShift AI には 2 つのディストリビューションがあります。

- Red Hat OpenShift Dedicated (AWS または GCP のカスタマークラウドサブスクリプション付き) または Red Hat OpenShift Service on Amazon Web Services (ROSA) 用の **マネージドクラウドサービスアドオン**。  
Red Hat マネージド環境での OpenShift AI に関する詳細は、[Red Hat OpenShift AI の製品ドキュメント](#) を参照してください。
- オンプレミスまたはパブリッククラウドに OpenShift Container Platform などの **セルフマネージド環境でインストールできるセルフマネージドソフトウェア**。  
接続環境または非接続環境の OpenShift クラスターでのセルフマネージドソフトウェアとしての OpenShift AI の詳細は、[Red Hat OpenShift AI Self-Managed の製品ドキュメント](#) を参照してください。

OpenShift AI がサポートするソフトウェアプラットフォーム、コンポーネント、および依存関係の詳細は、[サポートされる構成](#) を参照してください。

## 第2章 新機能および機能拡張

このセクションでは、Red Hat OpenShift AI 2.8 の新機能と拡張機能について説明します。

### 2.1. 新機能

#### 分散ワークロード

分散ワークロードにより、データサイエンティストは複数のクラスターノードを並行して使用して、より高速かつ効率的なデータ処理とモデルトレーニングを行うことができます。CodeFlare フレームワークは、タスクのオーケストレーションと監視を簡素化し、高度な GPU サポートによる自動リソーススケールリングと最適なノード利用のためのシームレスな統合を提供します。

データサイエンティスト向けに設計された CodeFlare フレームワークは、Jupyter Notebook または Python コードから直接ワークロード設定を可能にし、導入の障壁を低くし、合理化された中断のないワークフローを保証します。ワークロードを分散すると、タスクの完了時間が大幅に短縮され、より大規模なデータセットとより複雑なモデルの使用が可能になります。

#### シングルモデル提供プラットフォームのための認可プロバイダー

Authorino をシングルモデル提供(KServe)プラットフォームの承認プロバイダーとして追加できるようになりました。認可プロバイダーを追加すると、プラットフォームにデプロイするモデルのトークン承認を有効にすることができます。これにより、承認された当事者のみがモデルへの推論リクエストを送信できるようになります。

### 2.2. 機能拡張

#### 改善された Data Science Projects ユーザーインターフェイス

Data Science Projects ユーザーインターフェイス(UI)が再設計され、さまざまなプロジェクトコンポーネントへのアクセスと使い始めることが簡素化されました。新しい設計には、更新されたレイアウト、より視覚的に指向のインターフェイス、および各プロジェクトコンポーネントの概要を提供するための追加 UI テキストが含まれています。

#### データサイエンスパイプラインでの KubeFlow Pipelines v2 のサポート

OpenShift AI が最新の機能で更新された状態を維持するために、データサイエンスパイプラインは [KubeFlow Pipelines \(KFP\)バージョン 2.0](#) に基づいています。Data Science Pipelines (DSP) 2.0 は、デフォルトで OpenShift AI で有効化され、デプロイされます。詳細は、[Data Science Pipelines 2.0 の有効化](#) を参照してください。



#### 重要

以前は、OpenShift AI のデータサイエンスパイプラインは KubeFlow Pipelines v1 に基づいていました。OpenShift AI 2.9 のダッシュボードからデータサイエンスパイプライン v1 の詳細をデプロイし、表示し、編集することはできなくなりました。すでにデータサイエンスパイプラインを使用している場合は、DSP 2.0 の完全な機能パリティが安定した OpenShift AI リリースで配信され、新しいパイプラインソリューションに移行する準備ができるまで、OpenShift AI 2.8 のままにしておくことを推奨します。

Data Science Pipelines (DSP) 2.0 には、Argo Workflow のインストールが含まれていません。OpenShift AI は、Argo Workflow のこのインストールにおけるお客様の直接の使用をサポートしていません。DSP を使用して OpenShift AI 2.9 にインストールまたはアップグレードするには、クラスターに Argo Workflows の既存のインストールがないことを確認します。

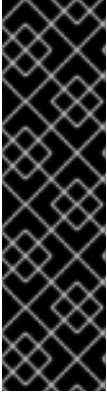
#### 更新されたワークベンチイメージ



---

ワークベンチイメージ用のプリインストールされたパッケージが 2024.1 イメージバージョンで更新されました。最新のワークベンチイメージバージョンを使用して、開発環境を最適化できます。ワークベンチイメージで使用される Python パッケージには、PyTorch や TensorFlow などの Python エコシステムの事前が含まれます。コードサーバー、RStudio、Elyra、Habana、および CUDA ワークベンチイメージをサポートするオペレーティングシステムには、そのツールの更新も受信されています。

## 第3章 テクノロジープレビューの機能



### 重要

このセクションでは、Red Hat OpenShift AI 2.8 のテクノロジープレビュー機能について説明します。テクノロジープレビュー機能は、Red Hat 製品サポートのサービスレベルアグリーメント (SLA) の対象外であり、機能的に完全ではないことがあります。Red Hat では、実稼働環境での使用を推奨していません。テクノロジープレビューの機能は、最新の製品機能をいち早く提供して、開発段階で機能のテストを行いフィードバックを提供していただくことを目的としています。

Red Hat のテクノロジープレビュー機能のサポート範囲に関する詳細は、[テクノロジープレビュー機能のサポート範囲](#) を参照してください。

### Code-server ワークベンチイメージ

Red Hat OpenShift AI には、**コードサーバー** ワークベンチイメージが含まれるようになりました。詳細は、[GitHub の code-server](#) を参照してください。

**コードサーバー** ワークベンチイメージを使用すると、さまざまな拡張機能を使用して新しい言語、テーマ、デバッガー、追加のサービスに接続することで、ワークベンチ環境をカスタマイズできます。構文の強調表示、自動インデント、括弧の一致により、データサイエンス作業の効率が向上します。



### 注記

Elyra ベースのパイプラインは、**コードサーバー** ワークベンチイメージでは使用できません。

code-server ノートブックイメージは現在、Red Hat OpenShift AI 2.8 でテクノロジープレビュー機能として利用できます。この機能は OpenShift AI 2.6 で初めて導入されました。

## 第4章 サポートの削除

このセクションでは、Red Hat OpenShift AI のユーザー向け機能のサポートにおける主な変更について説明します。

### 4.1. データサイエンスパイプライン V1 が V2 にアップグレード

以前は、OpenShift AI のデータサイエンスパイプラインは KubeFlow Pipelines v1 に基づいていました。OpenShift AI 2.9 以降、データサイエンスパイプラインは別のワークフローエンジンを使用して KubeFlow Pipelines v2 をベースにしています。Data Science Pipelines (DSP) 2.0 は、デフォルトで OpenShift AI で有効化され、デプロイされます。

OpenShift AI 2.9 のダッシュボードからデータサイエンスパイプライン v1 の詳細をデプロイし、表示し、編集することはできなくなりました。すでにデータサイエンスパイプラインを使用している場合は、DSP 2.0 の完全な機能パリティが安定した OpenShift AI リリースで配信され、新しいパイプラインソリューションに移行する準備ができるまで、OpenShift AI 2.8 のままにしておくことを推奨します。

フルサポートフェーズ期間を含む 2.8 リリースのライフサイクルの詳細は、[Red Hat OpenShift AI Self-Managed のライフサイクル](#) を参照してください。

DSP 2.0 の有効化は、[Data Science Pipelines 2.0 の有効化](#) を参照してください。



#### 重要

Data Science Pipelines (DSP) 2.0 には、Argo Workflow のインストールが含まれていません。OpenShift AI は、Argo Workflow のこのインストールにおけるお客様の直接の使用をサポートしていません。DSP を使用して OpenShift AI 2.9 にインストールまたはアップグレードするには、クラスターに Argo Workflows の既存のインストールがないことを確認します。

### 4.2. 埋め込みサブスクリプションチャンネルが使用されなくなる

OpenShift AI 2.8 以降、**組み込み** のサブスクリプションチャンネルは使用されなくなりました。Operator の新規インストールでは、**embedded** チャンネルを選択できなくなりました。サブスクリプションチャンネルの詳細は、Red Hat OpenShift AI Operator のインストールを参照してください。

### 4.3. バイアス検出の削除 (TRUSTYAI)

OpenShift AI 2.7 以降、バイアス検出 (TrustyAI) 機能が削除されました。以前にこの機能を有効にしていた場合、OpenShift AI 2.7 以降にアップグレードすると、この機能が削除されます。デフォルトの TrustyAI ノートブックイメージは引き続きサポートされます。

### 4.4. ワークベンチのバージョン 1.2 ノートブックコンテナイメージがサポートされなくなる

ワークベンチを作成するときは、ワークベンチで使用するノートブックコンテナイメージを指定します。OpenShift AI 2.5 以降では、新しいワークベンチを作成するときに、バージョン 1.2 のノートブックコンテナイメージを選択できません。バージョン 1.2 ノートブックイメージですでに実行されているワークベンチは、引き続き正常に動作します。ただし、Red Hat では、最新のノートブックコンテナイメージを使用するようにワークベンチを更新することを推奨します。

## 4.5. BETA サブスクリプションチャンネルが使用されなくなる

OpenShift AI 2.5 以降、ベータ サブスクリプションチャンネルは使用されなくなりました。Operator の新規インストール用の **beta** チャンネルを選択できなくなりました。サブスクリプションチャンネルの詳細は、Red Hat OpenShift AI Operator のインストール を参照してください。

## 第5章 解決した問題

Red Hat OpenShift AI 2.9 では、以下の重要な問題が解決されています。

### RHOAIENG-5067 - ModelMesh コンポーネントに基づくモデルサーバーのメトリクスページがロードされない

以前は、大文字またはスペースを含むデータサイエンスプロジェクト名により、ModelMesh コンポーネントに基づくモデルサーバーのメトリクスページで問題が発生する可能性があります。metrics ページでデータが正しく受信されていない可能性があり、**400 Bad Request** エラーが発生し、ページがロードされない可能性があります。この問題は解決されています。

### RHOAIENG-5025 - 自己署名証明書が最初に作成されたワークベンチに適用されない

以前は、自己署名証明書を使用するように認証局(CA)バンドルを追加した場合、証明書はデータサイエンスプロジェクトで作成された最初のワークベンチに適用されませんでした。この問題は解決されています。

### RHOAIENG-4966 - カスタム CA バンドルの自己署名証明書が `odh-trusted-ca-bundle` 設定マップにない可能性がある

以前は、自己署名証明書を使用するようにカスタム認証局(CA)バンドルを追加する場合、カスタム証明書が `odh-trusted-ca-bundle` ConfigMap にないか、ConfigMap が **managed** に設定されている場合に `odh-trusted-ca-bundle` ConfigMap が含まれていませんでした。この問題は解決されています。

### RHOAIENG-4938 (以前は RHOAIENG-4327 として文書化) - Workbenches は、一元的に設定されたバンドルの自己署名証明書を自動的に使用しません

OpenShift AI に自己署名証明書を追加するためのバンドルの選択肢には、`ca-bundle.crt` と `odh-ca-bundle.crt` の 2 つがあります。以前は、ワークベンチは一元管理されたバンドルからの自己署名証明書を自動的に使用せず、証明書パスを指す環境変数を定義する必要がありました。この問題は解決されています。

### RHOAIENG-4572 - 特定の状況で、インストールおよびアップグレード後にデータサイエンスパイプラインを実行できない

次の状況では、OpenShift AI をインストールまたはアップグレードした後、データサイエンスパイプラインを実行できません。

- OpenShift AI をインストールし、有効な CA 証明書がある。`default-dsci` オブジェクト内で、`trustedCABundle` フィールドの `managementState` フィールドをインストール後に **Removed** に変更した。
- OpenShift AI をバージョン 2.6 からバージョン 2.8 にアップグレードし、有効な CA 証明書がある。
- OpenShift AI をバージョン 2.7 からバージョン 2.8 にアップグレードし、有効な CA 証明書がある。

この問題は解決されています。

### RHOAIENG-4524 - RStudio イメージの BuildConfig 定義に間違っただランチが含まれている

**RStudio** および **CUDA** - RStudio ワークベンチイメージの BuildConfig 定義が、OpenShift AI の間違っただランチを参照しています。この問題は解決されています。

### RHOAIENG-3963 - 管理対象リソースに関する不必要な警告

以前は、**redhat-ods-applications** プロジェクトの **OdhDashboardConfig** カスタムリソースを編集して保存すると、システムは **Managed** リソース の警告メッセージを誤って表示していました。この問題は解決されています。

#### **RHOAIENG-2542** - 推論サービス Pod が Istio サイドカーを取得しないことがある

シングルモデルサービスプラットフォーム (KServe を使用) を使用してモデルをデプロイすると、推論サービスに **sidecar.istio.io/inject=true** アノテーションが付いている場合でも、作成される Pod から **istio-proxy** コンテナが欠落する場合があります。この問題は解決されています。

#### **RHOAIENG-1825** - 自己署名証明書を設定した後、Elyra を含むワークベンチでパイプラインの実行が失敗する場合があります

以前は、自己署名証明書を使用するようにカスタム認証局(CA)バンドルを追加すると、Elyra を含むワークベンチでパイプラインを実行することが失敗する可能性がありました。この問題は解決されています。

#### **RHOAIENG-1666** - Import Pipeline ボタンに早期にアクセスできる

以前は、データサイエンスプロジェクトに属するワークベンチにパイプラインをインポートすると、パイプラインサーバーが完全に利用可能になる前に **Import Pipeline** ボタンにアクセスできました。この問題は解決されています。

#### **RHOAIENG-642** (以前は RHODS-12903 として文書化されていました) - 正常に送信された Elyra パイプラインが実行に失敗する

以前は、プライベート TLS 証明書を使用し、Elyra 生成されたパイプラインをデータサイエンスパイプラインサーバーに正常に送信した場合、パイプライン手順は実行に失敗し、エラーメッセージが表示されていました。この問題は解決されています。

## 第6章 既知の問題

このセクションでは、Red Hat OpenShift AI 2.8 の既知の問題と、これらの問題を回避する既知の方法について説明します。

**RHOAIENG-6649** - 外部ルートが定義されていないモデルサーバー上でモデルを表示すると、エラーが表示されます。

ダッシュボードを使用して外部ルートを有効にしていないモデルサーバーにモデルをデプロイする場合、モデルの作成中に `t.components is undefined` エラーメッセージが表示されることがあります。

**RHOAIENG-6646** - アップグレード中に Model Serving ページを表示すると、エラーが表示される

OpenShift AI のアップグレード中にダッシュボードを使用してモデルをデプロイしようとする、`t.status is undefined` エラーメッセージが表示される可能性があります。

### 回避策

アップグレードされた OpenShift AI Operator の準備ができてから、ブラウザでページを更新します。

**RHOAIENG-6578** - Authorino Operator の削除後に認可トークンが実際にそれらを必要としないモデル

Authorino をシングルモデル提供プラットフォームの承認プロバイダーとして追加し、後で Authorino Operator を削除した場合、OpenShift AI ダッシュボードには、トークン認証が有効になっているモデルのトークンが表示される可能性があります。ただし、認可が有効になりなくなり、リクエストにトークンを指定せずにモデルへの推論リクエストを正常に実行できるようになります。

**RHOAIENG-6505** - 切断された環境：RayCluster TLS 証明書の作成に必要な追加イメージ

OpenShift AI 2.9 では、相互トランスポート層セキュリティ(mTLS)の実装時に、デフォルトイメージ (`quay.io/project-codeflare/ray:latest-py39-cu118`) が Ray クラスターの TLS 証明書作成に使用されます。非接続環境で分散ワークロードを使用する場合は、このイメージをミラーレジストリーに追加する必要があります。

**RHOAIENG-6486** - TensorFlow 2024.1 ノートブックイメージで Elyra JupyterLab 拡張機能を使用する場合は、Pod ラベル、アノテーション、および容認を設定できません

TensorFlow 2024.1 ノートブックイメージで Elyra JupyterLab 拡張機能を使用する場合、実行されたパイプラインから Pod ラベル、アノテーション、または容認を設定することはできません。これは、kfp および tf2onnx パッケージとの依存関係の競合が原因です。

### 回避策

TensorFlow 2024.1 ノートブックイメージを使用している場合は、作業が完了したら、割り当てられたワークベンチノートブックイメージを Standard Data Science 2024.1 ノートブックイメージに変更します。

Elyra JupyterLab 拡張の Pipeline Properties タブで、Tensorflow ランタイムイメージを、パイプラインノードごとの関連する Pod ラベル、アノテーション、または容認とともに、パイプラインノードのデフォルトのランタイムイメージとして個別に設定します。

**RHOAIENG-6435** - 分散ワークロードのリソースがプロジェクトメトリクスに含まれていない

Distributed Workloads Metrics > Project metrics をクリックして Requested resources セクションを表示すると、Requested by all projects の値は現在、キューにまだ許可されていない分散ワークロードのリソースを除外します。

## RHOAIENG-6409 - 正常に実行するためにパイプラインログに保存できないパラメーター エラーが表示される

Data Science Pipelines 2.0 でパイプラインを複数回実行すると、パイプライン実行を成功させるために **Cannot save** パラメーター エラーがパイプラインログに表示されます。これらのエラーは無視しても問題ありません。

## RHOAIENG-6376 - パイプラインコンポーネントの `pip_index_urls` をポート番号とパスを含む URL に設定した後に Pipeline 実行の作成に失敗する

パイプラインを作成し、コンポーネントの `pip_index_urls` 値を、ポート番号とパスを含む URL に設定し、パイプラインコードをコンパイルしてからパイプライン実行を作成すると、次のエラーが発生します。

```
ValueError: Invalid IPv6 URL
```

### 回避策

1. `protocol://hostname` のみを使用して新しい pip サーバーを作成し、コンポーネントの `pip_index_urls` の値を新しいサーバーで更新します。
2. パイプラインコードを再コンパイルします。
3. 新規の Pipeline 実行を作成します。

## RHOAIENG-6317 - ダッシュボードにパイプライン実行 Pod ログを表示するとエラーが表示される

OpenShift AI ダッシュボードのログビューアーを使用してパイプライン実行 Pod ログを表示すると、**Pod not found** エラーメッセージが表示される可能性があります。

### 回避策

ナレッジベースの記事 [Red Hat OpenShift AI ダッシュボードでパイプライン実行 Pod ログを表示する方法については、Data Science Pipelines 回避策](#) の手順に従います。

## RHOAIENG-5314 - ネットワークポリシーが原因で、データサイエンスパイプラインサーバーが新しいクラスターへのデプロイに失敗する

新規クラスター上でデータサイエンスパイプラインサーバーを作成すると、ユーザーインターフェイスの状態がロード中のままになり、パイプラインサーバーが起動しません。エラーメッセージ `Pipeline server failed` が表示される場合があります。

### 回避策

1. クラスター管理者として OpenShift Container Platform Web コンソールにログインします。
2. **Networking** > **NetworkPolicies** をクリックします。
3. **Project** リストをクリックして、プロジェクトを選択します。
4. **Create NetworkPolicy** ボタンをクリックします。
5. **Configure via** には、以下のように **YAML view** を選択し、ネットワークポリシーを定義します。

```
kind: NetworkPolicy
```



```

apiVersion: networking.k8s.io/v1
metadata:
  name: allow-from-redhat-ods-app-to-mariadb
spec:
  podSelector:
    matchLabels:
      app: mariadb-pipelines-definition
  ingress:
    - ports:
      - protocol: TCP
        port: 3306
      from:
        - podSelector:
            matchLabels:
              app.kubernetes.io/name: data-science-pipelines-operator
          namespaceSelector:
            matchLabels:
              kubernetes.io/metadata.name: redhat-ods-applications
    policyTypes:
      - Ingress

```

6. **Create** をクリックします。

#### RHOAIENG-4812 - 分散ワークロードメトリクスで GPU メトリクスを除外する

このリリースの OpenShift AI では、分散ワークロードメトリクスで GPU メトリクスが除外されます。

#### RHOAIENG-4570 - 既存の Argo Workflows のインストールがインストールまたはアップグレードと競合する

Data Science Pipelines (DSP) 2.0 には、Argo Workflow のインストールが含まれています。OpenShift AI は、Argo Workflow のこのインストールにおけるお客様の直接の使用をサポートしていません。DSP 2.0 を使用して OpenShift AI をインストールまたはアップグレードするには、クラスターに Argo Workflows の既存のインストールがないことを確認します。詳細は、[Data Science Pipelines 2.0 の有効化](#) を参照してください。

#### 回避策

既存の Argo Workflows インストールを削除するか、**datasciencepipelines** を **Removed** に設定してから、インストールまたはアップグレードを続行します。

#### RHOAIENG-3913 - Red Hat OpenShift AI Operator は、エラーで **Degraded state of False** を誤って表示します

OpenShift AI Operator によって使用される DataScienceCluster (DSC) オブジェクトで KServe コンポーネントを有効にしても、依存する Red Hat OpenShift Service Mesh および Red Hat OpenShift Serverless Operator がインストールされていない場合、DSC オブジェクトの **kserveReady** 状態は、KServe の準備ができていないと正しく表示されます。ただし、**Degraded** 状態には **False** の値が誤って表示されます。

#### 回避策

Red Hat OpenShift Serverless および Red Hat OpenShift Service Mesh Operator をインストールしてから、DSC を再作成します。

#### RHOAIENG-4252 - データサイエンスパイプラインサーバーの削除プロセスで **ScheduledWorkFlow** リソースの削除に失敗する

パイプラインサーバーの削除プロセスで、**ScheduledWorkFlow** リソースが削除されません。その結果、新しい DataSciencePipelinesApplications (DSPAs) が冗長な **ScheduledWorkFlow** リソースを認識しません。

### 回避策

1. パイプラインサーバーを削除します。詳細は、[パイプラインサーバーの削除](#) を参照してください。
2. OpenShift コマンドラインインターフェイス (CLI) で、クラスター管理者としてクラスターにログインし、次のコマンドを実行して冗長な **ScheduledWorkFlow** リソースを削除します。

```
$ oc -n <data science project name> delete scheduledworkflows --all
```

### RHOAIENG-4240 - 保護されていない環境でジョブを Ray クラスターに送信できない

保護されていない OpenShift クラスター内のノートブックから分散データサイエンスワークロードを実行すると、**ConnectionError: Failed to connect to Ray** というエラーメッセージが表示されることがあります。

### 回避策

ノートブックの **ClusterConfiguration** セクションで、**openshift\_oauth** オプションを **True** に設定します。

### RHOAIENG-3981 - 保護されていない環境で、Ray クラスターの準備が完了するまで待機する機能が停止する

保護されていない OpenShift クラスター内のノートブックから分散データサイエンスワークロードを実行すると、Ray クラスターの準備が完了するまで待機する機能 (**cluster.wait\_ready()**) が、Ray クラスターの準備が完了していても停止します。

### 回避策

次のいずれかの操作を実行します。

- ノートブックの **ClusterConfiguration** セクションで、**openshift\_oauth** オプションを **True** に設定します。
- **cluster.wait\_ready()** 機能を使用する代わりに、Ray クラスターのルート URL を開くことで、Ray クラスターの可用性を手動で確認できます。この URL で Ray ダッシュボードが利用可能であれば、クラスターの準備が完了しています。

### RHOAIENG-3025 - OVMS が要求するディレクトリーレイアウトが KServe StoragePuller レイアウトと競合する

OpenVINO Model Server (OVMS) ランタイムを使用してシングルモデルサービスプラットフォーム (KServe を使用) にモデルをデプロイすると、OVMS が要求するディレクトリーレイアウトと KServe で使用されるモデル取得ロジックのレイアウトの間に不一致が生じます。具体的には、OVMS はモデルファイルを `<mnt>/models/1/` ディレクトリーに配置することを要求しますが、KServe はモデルファイルを `<mnt>/models/` ディレクトリーに配置します。

### 回避策

次の操作を実行します。

1. S3 互換ストレージバケットで、モデルファイルを `1/` というディレクトリーに置きます (例: `<s3_storage_bucket>/models/1/<model_files>`)。
2. OVMS ランタイムを使用してシングルモデルサービスプラットフォームにモデルをデプロイするには、次のいずれかの方法を選択して、モデルファイルへのパスを指定します。
  - OpenShift AI ダッシュボードを使用してモデルをデプロイする場合は、データ接続の **Path** フィールドで、`<s3_storage_bucket>/models/` 形式を使用してモデルファイルへのパスを指定します。パスの一部として `1/` ディレクトリーを指定しないでください。
  - 独自の **InferenceService** カスタムリソースを作成してモデルをデプロイする場合は、**storageURI** フィールドの値を `<s3_storage_bucket>/models/` に設定します。パスの一部として `1/` ディレクトリーを指定しないでください。

KServe は、指定したパスのサブディレクトリーからモデルファイルを取得します。この場合、KServe は S3 互換ストレージの `<s3_storage_bucket>/models/1/` ディレクトリーからモデルファイルを正しく取得します。

#### RHOAIENG-3018 - KServe 上の OVMS がダッシュボードに正しいエンドポイントを公開しない

OpenVINO Model Server (OVMS) ランタイムを使用してシングルモデルサービスプラットフォームにモデルをデプロイした場合、デプロイしたモデルの **Inference endpoint** フィールドに表示される URL が不完全なものになります。モデルにクエリーを送信するには、URL の末尾に `/v2/models/<model-name>/infer` 文字列を追加する必要があります。 `<model-name>` は、デプロイしたモデルの名前に置き換えてください。

#### RHOAIENG-3378 - 内部イメージレジストリーが、Jupyter ノートブック生成プロセスの未宣言の強い依存関係である

OpenShift AI ノートブックおよびワークベンチを起動するには、その前に OpenShift Container Platform の内部の統合コンテナイメージレジストリーを有効にする必要があります。イメージレジストリーを有効にせずにノートブックまたはワークベンチを起動しようとすると、"InvalidImageName" エラーが発生して失敗します。

次のコマンドを使用して、クラスターに対してイメージレジストリーが有効になっているかどうかを確認できます。

```
$ oc get pods -n openshift-image-registry
```

#### 回避策

OpenShift Container Platform の内部の統合コンテナイメージレジストリーを有効にします。イメージレジストリーのセットアップおよび設定方法の詳細は [OpenShift Container Platform の Image Registry Operator](#) を参照してください。

#### RHOAIENG-2759 - プロジェクトにセキュリティーで保護されたモデルサーバーと通常のモデルサーバーの両方が存在する場合、モデルのデプロイメントが失敗する

1つのサーバーがトークン認証を使用し、もう1つのサーバーが認証を使用しないプロジェクトで2番目のモデルサーバーを作成すると、2番目のモデルのデプロイメントが開始できない場合があります。

#### RHOAIENG-2602 - ModelMesh Pod の再起動により、"平均応答時間" のサーバーメトリクスグラフに複数の行が表示される

ModelMesh Pod が再起動されると、**平均応答時間** のサーバーメトリクスグラフに複数の行が表示されます。

**RHOAIENG-2585 - クラスターで UWM が有効になっていない場合、UI にエラー/警告が表示されない**

クラスターで User Workload Monitoring (UWM) が **無効化** されている場合、Red Hat OpenShift AI はユーザーに正しく警告しません。UWM は、モデルメトリクスが正しく機能するために必要です。

**回避策**

[ユーザー定義プロジェクトのモニタリングの有効化](#) の説明に従って、クラスター内で UWM が有効になっていることを手動で確認します。

**RHOAIENG-2555 - フォームでサービスランタイムを変更すると、モデルフレームワークセレクターがリセットされない**

**Deploy model** ダイアログを使用してシングルモデルサービスプラットフォームにモデルをデプロイするときに、ランタイムとサポートされているフレームワークを選択した後で別のランタイムに切り替えても、既存のフレームワークの選択がリセットされません。そのため、選択したランタイムでサポートされていないフレームワークを使用してモデルをデプロイできます。

**回避策**

モデルのデプロイ時に、選択したランタイムを変更する場合は、**Select a framework** リストを再度クリックして、サポートされているフレームワークを選択してください。

**RHOAIENG-2468 - KServe と同じプロジェクト内のサービスが OpenShift でアクセスできなくなる場合がある**

シングルモデルサービスプラットフォーム (KServe を使用) にデプロイされたモデルを含むデータサイエンスプロジェクトに OpenShift AI 以外のサービスをデプロイする場合、サービスのアクセシビリティが、OpenShift クラスターのネットワーク設定の影響を受ける可能性があります。これは、[OVN-Kubernetes ネットワークプラグイン](#) をホストのネットワーク namespace と組み合わせて使用している場合に、特に起こりやすくなります。

**回避策**

次のいずれかの操作を実行します。

- シングルモデルサービスプラットフォームにデプロイされたモデルが含まれていない別のデータサイエンスプロジェクトに、サービスをデプロイします。または、別の OpenShift プロジェクトにサービスをデプロイします。
- 次の例に示すように、サービスが存在するデータサイエンスプロジェクトで、アプリケーション Pod への Ingress トラフィックを受け入れる [ネットワークポリシー](#) を追加します。

```
apiVersion: networking.k8s.io/v1
kind: NetworkPolicy
metadata:
  name: allow-ingress-to-myapp
spec:
  podSelector:
    matchLabels:
      app: myapp
  ingress:
    - {}
```

**RHOAIENG-2312 - コードサーバーワークベンチで numpy のインポートが失敗する**

code-server ワークベンチに **numpy** をインポートすると失敗します。

## 回避策

- code-server ワークベンチの **Activity bar** から、メニューアイコン( ) >  **View > Command Palette** を選択して、Command Palette を開きます。  
Firefox では、F1 キーボードショートカットを使用してコマンドパレットを開くことができます。
- python: s** と入力します。
- ドロップダウンリストから、**Python: Select interpreter** アクションを選択します。
- Select Interpreter** ダイアログで、**Enter interpreter path...** を選択します。
- インタープリターのパスとして **/opt/app-root/bin/python3** と入力し、**Enter** を押します。
- ドロップダウンリストから、新しい Python インタープリターを選択します。
- 新しいインタープリター (**app-root**) が **ステータスバー** に表示されることを確認します。選択したインタープリターは、ワークベンチを停止して再起動しても保持されるため、回避策はワークベンチごとに1回だけ実行する必要があります。

### RHOAIENG-2228 - 間隔が 15 秒に設定されている場合、パフォーマンスメトリクスグラフが絶えず変化する

モデルメトリクス画面の **Endpoint performance** タブで、**Refresh interval** を 15 秒に、**Time range** を 1 時間に設定すると、グラフの結果は連続的に変化します。

### RHOAIENG-2183 - エンドポイントのパフォーマンスグラフに間違ったラベルが表示される場合がある

モデルメトリクス画面の **Endpoint performance** タブで、グラフツールチップに誤ったラベルが表示される場合があります。

### RHOAIENG-1919 - モデルサービスページが、デプロイメント直後にモデルルート URL の取得または報告に失敗する

OpenShift AI ダッシュボードからモデルをデプロイすると、システムは次の警告メッセージを表示し、モデルの **Status** 列には **OK** または緑色のチェックマークが付き、成功したことを示します。

```
Failed to get endpoint for this deployed model. routes.rout.openshift.io"<model_name>" not found
```

## 回避策

ブラウザページを更新します。

### RHOAIENG-1452 - Red Hat OpenShift AI アドオンがスタックする

Red Hat OpenShift AI アドオンのアンインストールは、OCM API 経由でトリガーされた後、OpenShift AI コンポーネントを削除しません。

## 回避策

以下のように、残りの OpenShift AI リソースを手動で削除します。

- DataScienceCluster** CR を削除します。
- すべての Pod が **redhat-ods-applications** namespace から削除されるまで待ちます。

3. Serverless が **DataScienceCluster** CR で **Managed** に設定されている場合、すべての Pod が **knative-serving** namespace から削除されるまで待機します。
4. **DSCInitialization** CR を削除します。
5. **DSCInitialization** CR で Service Mesh が **Managed** に設定されている場合は、すべての Pod が **istio-system** namespace から削除されるまで待ちます。
6. Red Hat OpenShift AI Operator をアンインストールします。
7. すべての Pod が **redhat-ods-operator** namespace および **redhat-ods-monitoring** namespace から削除されるまで待ちます。

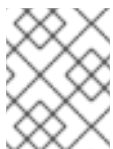
### RHOAIENG-880 - デフォルトのパイプラインサービスアカウントが Ray クラスタを作成できない

デフォルトのパイプラインサービスアカウントを使用して Ray クラスタを作成することはできません。

#### 回避策

CodeFlare SDK を使用して認証するには、次の行をパイプラインコードに追加します。

```
from codeflare_sdk.cluster.auth import TokenAuthentication
auth = TokenAuthentication(
    token=openshift_token, server=openshift_server
)
auth_return = auth.login()
```



#### 注記

クラスタで自己署名証明書を使用している場合は、**TokenAuthentication** パラメータリストに **ca-cert-path=<path>** を含めます。

### RHOAIENG-404 - OpenShift AI のダッシュボードで、Enabled ページではなく "No Components Found" というページがランダムに表示される

Red Hat OpenShift AI ダッシュボードにアクセスすると、No Components Found というページが表示される場合があります。

#### 回避策

ブラウザのページを更新します。

### RHOAIENG-234 - 安全でないクラスタの VSCode で .ipynb ファイルを表示できない

安全でないクラスタ内の Google Chrome で code-server ノートブックイメージを使用すると、.ipynb ファイルを表示できません。

#### 回避策

別のブラウザを使用してください。

### RHOAIENG-2541 - クラスタ内のシークレットが多すぎるため、KServe コントローラー Pod で OOM が発生する



OpenShift クラスターにシークレットが多数ある場合、out-of-memory (OOM) エラーが原因で KServe コントローラー Pod が継続的にクラッシュする可能性があります。

### 回避策

KServe コントローラー Pod が安定するまで、OpenShift クラスター内のシークレット数を減らします。

### RHOAIENG-1128 - ワークベンチに接続されていない永続ボリューム (PV) のサイズを増やそうとすると、不明確なエラーメッセージが表示される

ワークベンチに接続されていない永続ボリューム (PV) のサイズを増やそうとすると、不明確なエラーメッセージが表示されます。

### 回避策

サイズを増やす前に、PV がワークベンチに接続されていることを確認してください。

### RHOAIENG-545 - JupyterLab パイプラインエディターで汎用のデフォルトノードランタイムイメージを指定できない

JupyterLab IDE パイプラインエディターで Elyra パイプラインを編集し、PIPELINE PROPERTIES タブをクリックして、Generic Node Defaults セクションまでスクロールして Runtime Image フィールドを編集した場合、変更は保存されません。

### 回避策

必要なランタイムイメージをノードごとに明示的に定義します。NODE PROPERTIES タブをクリックし、Runtime Image フィールドに必要なイメージを指定します。

### RHOAIENG-497 - DSCI を削除すると、OpenShift Service Mesh CR がユーザーへの通知なしに削除される

DSCInitialization リソースを削除すると、OpenShift Service Mesh CR も削除されます。警告メッセージは表示されません。

### RHOAIENG-307 - DataScienceCluster を削除すると、すべての OpenShift Serverless CR が削除される

DataScienceCluster カスタムリソース (CR) を削除すると、すべての OpenShift Serverless CR (knative-serving、デプロイメント、ゲートウェイ、Pod を含む) も削除されます。警告メッセージは表示されません。

### RHOAIENG-282 - 必要なリソースが利用できない場合、ワークロードはディスパッチすべきではない

場合によっては、単一マシンインスタンスに RayCluster を正常にプロビジョニングするために十分なリソースがない場合でも、ワークロードがディスパッチされることがあります。AppWrapper CRD は Running 状態のままであり、関連する Pod は無期限に Pending 状態になります。

### 回避策

追加のリソースをクラスターに追加します。

### RHOAIENG-131 - InferenceService が Loaded と報告した後、gRPC エンドポイントが適切に応答しない

多数の InferenceService インスタンスが生成され、リクエストがダイレクトされると、Service Mesh Control Plane (SMCP) が応答しなくなります。InferenceService インスタンスのステータスは Loaded ですが、gRPC エンドポイントへの呼び出しはエラーとともに返されます。

## 回避策

**ServiceMeshControlPlane** カスタムリソース (CR) を編集して、Istio の egress Pod と ingress Pod のメモリー制限を増やします。

### RHOAIENG-130 - モデルが起動されたばかりの場合の同期の問題

KServe コンテナのステータスが **Ready** の場合、TGIS コンテナの準備ができていなくてもリクエストは受け入れられます。

## 回避策

数秒待って、すべての初期化が完了し、TGIS コンテナが実際に準備完了であることを確認してから、リクエストの出力を確認します。

### RHOAIENG-3115 - モデルが準備完了として表示された後も数秒間クエリーできない

マルチモデル対応プラットフォームを使用してデプロイされたモデルは、ダッシュボードに **Ready** と表示されてもクエリーに 응답しない場合があります。モデルエンドポイントにクエリーを実行すると、"Application is not available" という応答が表示されることがあります。

## 回避策

30 - 40 秒待ってから、ブラウザでページを更新します。

### RHOAIENG-1619 (以前は DATA-SCIENCE-PIPELINES-165 として記録されていた問題) - S3 バケットが書き込み可能でない場合の不適切なエラーメッセージ

データ接続を設定し、S3 バケットが書き込み可能でない場合にパイプラインをアップロードしようとすると、**Failed to store pipelines** というエラーメッセージが表示されますが、有用ではありません。

## 回避策

データ接続の認証情報が正しいこと、および指定したバケットへの書き込みアクセス権があることを確認してください。

### RHOAIENG-1207 (以前は ODH-DASHBOARD-1758 として記録されていた問題) - OOTB カスタムサービスランタイムを複数複製するときエラーが発生する

モデルサービスランタイムを複数複製すると、複製が失敗し、**Serving runtime name "<name>" already exists** というエラーメッセージが表示されます。

## 回避策

**metadata.name** フィールドを一意的な値に変更します。

### RHOAIENG-1204 (以前は ODH-DASHBOARD-1771 として記録されていた問題) - パイプラインステップの初期化中の JavaScript エラー

実行が開始されると Run details ページが機能しなくなることがあります。

## 回避策

ページを更新します。

### RHOAIENG-1203 (以前は ODH-DASHBOARD-1781 として記録されていた問題) - 開始済み実行ステータスのツールチップが表示されない

データサイエンスパイプラインの実行では、表示されるステータスアイコンのツールチップテキストが表示されないことがあります。



## 回避策

詳細は、Pipeline の **Run details** ページを表示し、実行出力を確認します。

### RHOAIENG-1201 (以前は ODH-DASHBOARD-1908 として記録されていた問題) - 空の環境変数でワークベンチを作成できない

ワークベンチを作成するときに、**Add variable** をクリックしてもリストから環境変数のタイプを選択しないと、ワークベンチを作成できません。このフィールドは必須としてマークされておらず、エラーメッセージも表示されません。

### RHOAIENG-1196 (以前は ODH-DASHBOARD-2140 として記録されていた問題) - ダッシュボードに表示されるパッケージバージョンがインストールされたバージョンと一致しない

ダッシュボードには、JupyterLab や Notebook などのパッケージの不正確なバージョン番号が表示される場合があります。パッケージが手動で更新された場合、イメージ内のパッケージのバージョン番号が異なる場合があります。

## 回避策

パッケージの実際のバージョン番号を確認するには、次の例に示すように、**pip list** コマンドを実行してパッケージ名を検索します。

```
$ pip list | grep jupyterlab
jupyterlab          3.5.3
$ pip list | grep notebook
notebook            6.5.3
```

### RHOAIENG-582 (以前は ODH-DASHBOARD-1335 として記録されていた問題) - Edit 権限の名前を Contributor に変更する

**Edit** という用語は正確ではありません。

- ほとんどのリソースで、**Edit** 権限を持つユーザーは、リソースを編集できるだけでなく、リソースを作成および削除することもできます。
- **Edit** 権限を持つユーザーは、プロジェクトを編集できません。

**Contributor** という用語は、この権限によって付与されるアクションをより正確に表します。

### RHOAIENG-432 (以前は RHODS-12928 として記録されていた問題) - サポートされていない文字を使用すると、複数のダッシュを含む Kubernetes リソース名が生成される場合がある

リソースを作成し、サポートされていない文字を名前として指定すると、各スペースがダッシュに置き換えられ、他のサポートされていない文字が削除されるため、リソース名が無効になる可能性があります。

### RHOAIENG-226 (以前は RHODS-12432 として記録されていた問題) - notebook-culler ConfigMap を削除すると、ダッシュボードに Permission Denied と表示される

**redhat-ods-applications** namespace で **notebook-controller-culler-config** ConfigMap を削除すると、OpenShift AI ダッシュボードの **Cluster Settings** ページへの変更を保存できなくなります。保存操作は、**HTTP request has failed** というエラーで失敗します。

## 回避策

**cluster-admin** 権限を持つユーザーとして以下の手順を実行します。

1. oc クライアントを備わった クラスタにログインします

1. `oc` コマンドを使用して、ノートブックの Pod を更新します。
2. 次のコマンドを入力して、**redhat-ods-applications** アプリケーション namespace の **OdhDashboardConfig** カスタムリソースを更新します。

```
$ oc patch OdhDashboardConfig odh-dashboard-config -n redhat-ods-applications --
type=merge -p '{"spec": {"dashboardConfig": {"notebookController.enabled": true}}}'
```

### RHOAIENG-133 - ノートブックの再起動後、既存のワークベンチが Elyra パイプラインを実行できない

Elyra JupyterLab 拡張機能を使用して JupyterLab 内でデータサイエンスパイプラインを作成および実行し、ワークベンチを作成してワークベンチ内でノートブックイメージを指定した後にパイプラインサーバーを設定すると、ノートブックを再起動した後もパイプラインを実行できません。

#### 回避策

1. 実行中のノートブックを停止します。
2. ワークベンチを編集して小さな変更を加えます。たとえば、新しいダミー環境変数を追加したり、既存の不要な環境変数を削除したりします。変更を保存します。
3. ノートブックを再起動します。
4. JupyterLab の左側のサイドバーで、**Runtimes** をクリックします。
5. デフォルトのランタイムが選択されていることを確認します。

### RHOAIENG-52 - 自己署名証明書を使用したクラスターでトークン認証が失敗する

自己署名証明書を使用し、ノートブックまたは Python スクリプトでパイプラインの一部として Python **codeflare-sdk** を使用すると、トークン認証は失敗します。

### RHOAIENG-11 - 個別にインストールされた CodeFlare Operator のインスタンスはサポートされていない

Red Hat OpenShift AI では、CodeFlare Operator はベース製品に含まれており、別個の Operator には含まれていません。Red Hat またはコミュニティから個別にインストールされた CodeFlare Operator のインスタンスはサポートされていません。

#### 回避策

インストールされている CodeFlare Operators をすべて削除し、Red Hat OpenShift AI をインストールして設定します。Red Hat ナレッジベースソリューションの [How to migrate from a separately installed CodeFlare Operator in your data science cluster](#) の説明に従ってください。

### RHODS-12798 - Pod が "unable to init seccomp" エラーで失敗する

**seccomp** メモリーリークを引き起こす既知のカーネルバグが原因で、Pod は **Running** のステータスではなく **CreateContainerError** ステータスまたは **Pending** ステータスで失敗します。Pod が失敗した namespace でイベントをチェックするか、**oc describe pod** コマンドを実行すると、以下のエラーが表示されます。

```
runc create failed: unable to start container process: unable to init seccomp: error loading seccomp
filter into kernel: error loading seccomp filter: errno 524
```

#### 回避策

Red Hat ナレッジベースのソリューション記事 [Pods failing with error loading seccomp filter into kernel: errno 524 in OpenShift 4](#) の説明に従って、`net.core.bpf_jit_limit` の値を増やします。

### KUBEFLOW-177 - OAuth-proxy で転送されないアプリケーションのベアラートークン

アプリケーションの内部認証メカニズムがベアラートークンに基づいている場合、アプリケーションをカスタムワークベンチイメージとして使用できません。OAuth プロキシ設定によりヘッダーからベアラートークンが削除されるため、アプリケーションは適切に動作できなくなります。

### RHOAIENG-5646 (以前は NOTEBOOKS-218 として文書化されていました) - Elyra パイプラインエディターから保存されたデータサイエンスパイプラインが互換性のないランタイムを参照している

OpenShift AI バージョン 1.31 以前で、Elyra パイプラインエディターに `.pipeline` 形式でパイプラインを保存すると、パイプラインは OpenShift AI バージョン 1.32 以降と互換性のないランタイムを参照します。

その結果、OpenShift AI をバージョン 1.32 以降にアップグレードした後、パイプラインは実行に失敗します。

#### 回避策

OpenShift AI バージョン 1.32 以降にアップグレードした後、関連するランタイムイメージを再度選択します。

### NOTEBOOKS-210 - Jupyter でノートブックを PDF ファイルとしてエクスポートできない

Jupyter でノートブックを PDF ファイルとしてエクスポートすると、エラーが発生してエクスポートプロセスが失敗します。

### RHOAIENG-1210 (以前は ODH-DASHBOARD-1699 として記録されていた問題) - すべての設定変更に対してワークベンチが自動的に再起動しない

設定の変更を加えるとワークベンチが再起動されることを示す警告メッセージが、ワークベンチの設定の編集時に表示されます。次の場合、ワークベンチは自動的に再起動しないため、この警告は誤解を招きます。

- 名前を編集する
- 説明を編集する
- 既存の環境変数のキーおよび値を編集、追加、または削除する

#### 回避策

ワークベンチを手動で再起動します。

### RHOAIENG-1208 (以前は ODH-DASHBOARD-1741 として記録されていた問題) - 名前が数字で始まるワークベンチを作成できない

名前が数字で始まるワークベンチを作成しようとする、ワークベンチは起動しません。

#### 回避策

ワークベンチを削除し、文字で始まる名前を付けて新しいワークベンチを作成します。

### RHOAIENG-1205 (以前は RHODS-11791 として記録されていた問題) - アップグレード後に使用状況データの収集が有効になる

以前に **Allow collection of usage data** オプションの選択を解除していた (つまり、無効にしていた) 場合、OpenShift AI をアップグレードすると、このオプションが選択されます (つまり、有効になります)。

### 回避策

**Allow collection of usage data** オプションを手動でリセットします。これを行うには、次のアクションを実行します。

1. OpenShift AI ダッシュボードの左側のメニューで、**Settings** → **Cluster settings** をクリックします。  
**Cluster Settings** ページが開きます。
2. **Usage data collection** セクションで、**Allow collection of usage data** の選択を解除します。
3. **Save Changes** をクリックします。

### **KUBEFLOW-157**: OpenShift AI ダッシュボードからすでにログアウトしている場合、JupyterLab からのログアウトが機能しない

JupyterLab からログアウトする前に OpenShift AI ダッシュボードからログアウトすると、JupyterLab から正常にログアウトされません。たとえば、Jupyter ノートブックの URL がわかっている場合は、これをブラウザで再度開くことができます。

### 回避策

OpenShift AI ダッシュボードからログアウトする前に、JupyterLab からログアウトします。

### **RHODS-9789**: データベース名またはユーザー名フィールドにダッシュがあるカスタムデータベースが含まれる場合はパイプラインサーバーは起動に失敗する

カスタムデータベースを使用するパイプラインサーバーを作成する場合、**dbname** フィールドまたは **username** フィールドに設定した値にダッシュが含まれていると、パイプラインサーバーは起動に失敗します。

### 回避策

パイプラインサーバーを編集して、対象のフィールドからダッシュを削除します。

### **RHOAIENG-580** (以前は **RHODS-9412** として記録されていた問題) - 編集権限を持つユーザーがワークベンチを作成した場合、Elyra パイプラインが実行に失敗する

プロジェクトの編集権限を付与されたユーザーがプロジェクトワークベンチを作成すると、そのユーザーには次の動作が表示されます。

- ワークベンチの作成プロセス中に、Kubernetes ロールバインディングの作成に関連する **Error creating workbench** メッセージがユーザーに表示されます。
- 前述のエラーメッセージにもかかわらず、OpenShift AI は引き続きワークベンチを作成します。ただし、このエラーメッセージは、ユーザーがワークベンチを使用して Elyra データサイエンスパイプラインを実行できないことを意味します。
- ユーザーがワークベンチを使用して Elyra パイプラインを実行しようとする、Jupyter は初期化の失敗を説明する **Error making request** メッセージを表示します。

### 回避策

管理者権限を持つユーザー（プロジェクト所有者など）は、編集権限を持つユーザーに代わってワークベンチを作成する必要があります。その後、そのユーザーはワークベンチを使用して Elyra パイプラインを実行できるようになります。

### RHOAIENG-583 (以前は RHODS-8921 および RHODS-6373 として記録されていた問題) - 累積文字数上限を超えると、パイプラインサーバーの作成やワークベンチの起動ができない

データサイエンスプロジェクト名とパイプラインサーバー名の累積文字数上限である 62 文字を超えると、パイプラインサーバーを正常に作成できません。同様に、データサイエンスプロジェクト名とワークベンチ名の累積文字数上限である 62 文字を超えると、ワークベンチが起動しません。

#### 回避策

データサイエンスプロジェクトの名前を 30 文字を超えないように変更します。

### RHODS-7718: ダッシュボード権限のないユーザーは、実行中のノートブックとワークベンチを無期限に使用し続けることができる

Red Hat OpenShift AI 管理者がユーザーの権限を取り消しても、引き続きユーザーは実行中のノートブックとワークベンチを無期限で使用できます。

#### 回避策

OpenShift AI 管理者がユーザーの権限を取り消す場合、管理者はそのユーザーに対して実行中のノートブックとワークベンチも停止する必要があります。

### RHOAIENG-1157 (以前は RHODS-6955 として記録されていた問題) - ワークベンチを編集しようとするとエラーが発生することがある

ワークベンチの編集時に、以下のようなエラーが発生する可能性があります。

```
Error creating workbench
Operation cannot be fulfilled on notebooks.kubeflow.org "workbench-name": the object has been modified; please apply your changes to the latest version and try again
```

### RHOAIENG-1132 (以前は RHODS-6383 として記録されていた問題) - ワークベンチの作成プロセス中に必要なときに ImagePullBackOff エラーメッセージが表示されない

コンテナレジストリーからコンテナイメージをプルする際に、Pod で問題が発生する可能性があります。エラーが発生した場合、関連する Pod は **ImagePullBackOff** 状態になります。ワークベンチの作成プロセス中に **ImagePullBackOff** エラーが発生した場合は、適切なメッセージが表示されません。

#### 回避策

イベントログで **ImagePullBackOff** エラーの詳細を確認します。これを行うには、ワークベンチの起動時にワークベンチのステータスをクリックします。

### RHOAIENG-1152 (以前は RHODS-6356 として記録されていた問題) - ダッシュボードにログインしたことがないユーザーのノートブック作成プロセスが失敗する

ダッシュボードのノートブック **Administration** ページには、OpenShift のユーザーグループと管理者グループに属するユーザーが表示されます。ただし、管理者がダッシュボードにログインしたことの無いユーザーに代わってノートブックサーバーを起動しようとすると、サーバーの作成プロセスが失敗し、次のエラーメッセージが表示されます。

```
Request invalid against a username that does not exist.
```

#### 回避策



該当するユーザーにダッシュボードへのログインを依頼します。

### RHODS-5763: ノートブックの選択時に誤ったパッケージバージョンが表示される

Start a notebook server ページには、Anaconda ノートブックイメージの正しくないバージョン番号が表示されます。

### RHODS-5543: NVIDIA GPU Operator を使用すると、Node Autoscaler によって必要以上のノードが作成される

使用可能なリソースが不十分なために Pod をスケジュールできないと、Node Autoscaler は新しいノードを作成します。新しく作成されたノードが関連する GPU ワークロードを受け取るまで、遅延があります。したがって、Pod をスケジュールすることはできず、Node Autoscaler は、ノードの1つが GPU ワークロードを受け取る準備ができるまで、追加の新しいノードを継続的に作成します。この問題の詳細は、Red Hat ナレッジベースのソリューション記事 [NVIDIA GPU Operator を使用すると、Node Autoscaler によって必要以上のノードが作成される](#) を参照してください。

#### 回避策

`machineset.spec.template.spec.metadata` で `cluster-api/accelerator` ラベルを適用します。これにより、オートスケーラーは、GPU ドライバーがデプロイされるまで、これらのノードを準備ができていないと見なします。

### RHOAIENG-1149 (以前に文書化された RHODS-5216) - アプリケーション起動メニューに OpenShift Cluster Manager へのリンクが誤って表示される

Red Hat OpenShift AI は、アプリケーションランチャーメニューから OpenShift Cluster Manager へのリンクを誤って表示します。このリンクをクリックすると、URL が無効なため、"Page Not Found" エラーが発生します。

### RHOAIENG-1137 (以前は RHODS-5251 として記録されていた問題) - ノートブックサーバー管理ページに権限へのアクセスを失ったユーザーが表示される

以前に Jupyter でノートブックサーバーを起動したユーザーがその権限を失った場合 (たとえば、OpenShift AI 管理者がユーザーのグループ設定を変更したり、許可されたグループからユーザーを削除したりした場合)、管理者は引き続きサーバーの **Administration** ページでユーザーのノートブックサーバーを表示します。その結果、管理者は、権限が取り消されたユーザーに属するノートブックサーバーを再起動できるようになります。

### RHODS-4799: Tensorboard を表示するには手動の手順が必要

TensorFlow または PyTorch ノートブックイメージを使用しており、TensorBoard を使用してデータを表示する場合に、ノートブック環境に環境変数を追加して、独自のコードで使用する環境変数をインポートするといった手作業の手順が必要です。

#### 回避策

ノートブックサーバーを起動するときに、次のコードを使用して `TENSORBOARD_PROXY_URL` 環境変数の値を設定し、OpenShift AI ユーザー ID を使用します。

```
import os
os.environ["TENSORBOARD_PROXY_URL"] = os.environ["NB_PREFIX"] + "/proxy/6006/"
```

### RHODS-4718: Intel® oneAPI AI Analytics Toolkits のクイックスタートが、存在しないサンプルノートブックを参照している

ダッシュボードの **Resources** ページにある Intel® oneAPI AI アナリティクスツールキットクイックスタートでは、手順の一部としてサンプルノートブックをロードする必要がありますが、関連するリポジトリに存在しないノートブックを参照しています。

#### **RHODS-4627: Anaconda Professional Edition ライセンスの検証を担当する Cron ジョブが一時停止し、毎日は実行されない**

Anaconda Professional Edition ライセンスの検証を担当する CronJob は、OpenShift AI Operator により自動的に一時停止します。その結果、Cron ジョブはスケジュールどおりに毎日実行されません。さらに、Anaconda Professional Edition のライセンスの有効期限が切れると、Anaconda Professional Edition は OpenShift AI ダッシュボードで無効と示されません。

#### **RHOAIENG-1141 (以前は RHODS-4502 として記録されていた問題) - ダッシュボード上の NVIDIA GPU Operator タイルに不必要にボタンが表示される**

NVIDIA GPU Operator がインストールされると、Jupyter で GPU が自動的に使用可能になります。したがって、**Explore** ページの Nvidia GPU Operator タイルにある **Enable** ボタンは不要です。さらに、**Enable** ボタンをクリックすると、Operator がインストールされていない場合でも、NVIDIA GPU Operator タイルが **Enabled** ページに移動します。

#### **RHOAIENG-1135 (以前は RHODS-3985 として記録されていた問題) - ISV Operator のアンインストール後、ダッシュボードに Enabled ページのコンテンツが表示されない**

ISV Operator をアンインストールすると、ダッシュボードの **Enabled** ページにコンテンツが表示されません。代わりに、以下のエラーが表示されます。

```
Error loading components
HTTP request failed
```

#### **回避策**

30 - 40 秒待ってから、ブラウザでページを更新します。

#### **RHODS-3984: ノートブックの選択時に誤ったパッケージバージョンが表示される**

OpenShift AI インターフェイスで、**Start a notebook server** ページに、oneAPI AI Analytics Toolkit ノートブックイメージに含まれる JupyterLab パッケージおよび Notebook パッケージの誤ったバージョン番号が表示されます。このページには、このイメージが使用する Python バージョンの誤った値が表示される場合もあります。

#### **回避策**

oneAPI AI Analytics Toolkit ノートブックサーバーを起動するときに、ノートブックセルで **!pip list** コマンドを実行すると、ノートブックサーバーにインストールされている Python パッケージと、所有しているパッケージのバージョンを確認できます。

#### **RHODS-2956: ノートブックインスタンスの作成時にエラーが発生する可能性がある**

Jupyter でノートブックインスタンスを作成すると、**Directory not found** エラーが断続的に表示されます。このエラーメッセージは、**Dismiss** をクリックすると無視できます。

#### **RHOAIENG-1147 (以前は RHODS-2881 として記録されていた問題) - ダッシュボード上のアクションが明確に表示されない**

無効になったアプリケーションのライセンスを再検証し、無効になったアプリケーションのタイルを削除するダッシュボードアクションは、ユーザーには明確に表示されません。これらのアクションは、ユーザーがアプリケーションタイルの **Disabled** ラベルをクリックすると表示されます。その結果、意図したワークフローがユーザーにとって明確でない場合があります。

### **RHOAIENG-1134** (以前は RHODS-2879 として記録されていた問題) - ライセンス再検証アクションが不必要に表示される

無効になったアプリケーションのライセンスを再検証するダッシュボードアクションは、ライセンス検証またはアクティベーションシステムがないアプリケーションでは不要に表示されます。さらに、ユーザーが再検証できないライセンスを再検証しようとしても、アクションを完了できない理由を示すフィードバックが表示されません。

### **RHOAIENG-2305** (以前は RHODS-2650 として記録されていた問題) - Pachyderm のデプロイ中にエラーが発生することがある

Pachyderm Operator のインスタンスを作成すると、Webhook エラーが断続的に表示され、作成プロセスを正常に開始できなくなります。Webhook エラーは、Pachyderm Operator がヘルスチェックに失敗して再起動したか、Operator プロセスがコンテナに割り当てられたメモリー制限を超えてメモリー不足 (OOM) キルをトリガーしたことを示しています。

#### **回避策**

エラーが表示されなくなるまで、Pachyderm インスタンスの作成プロセスを繰り返します。

### **RHODS-2096** - IBM Watson Studio は OpenShift AI で利用できない

IBM Watson Studio は、OpenShift AI が OpenShift Dedicated 4.9 以降にインストールされている場合は使用できません。これは、OpenShift Dedicated のこれらのバージョンと互換性がないためです。OpenShift Dedicated 4.9 以降で Watson Studio を手動で設定する方法は、[Marketplace サポート](#) にお問い合わせください。



## 第7章 製品機能

Red Hat OpenShift AI は、データサイエンティストおよび IT オペレーション管理者に豊富な機能を提供します。詳細は、[Red Hat OpenShift AI の概要](#) を参照してください。